

男女別の「研究室」。空間のどこにも、教壇はありません。それどころか、先生がどこにいるのか、すぐに見つけることさえ困難です。実は先生は、子どもたちに交じって机を並べ、先生自身も研究活動をしています。



その空間には、教室もなければ、教壇もない。周囲を本棚がぐるりと囲み、緑が生い茂っている。それはかつて修道院にあった大きな図書室のよう。

子どもたちの机は、一方向を向いていない。繋がってはいるが、ワークのためのグループではないようだ。彼らは、思い思いに本を読み、考え、ノートを作っている。

先生は…？ 制服に交じって、大人の姿が見えた。本を読み、思いを巡らせたり、時には子どもたちと会話している。

ここには、先生、生徒という垣根がない。彼らはみんな「研究員」であり、それぞれが自らの切り口で、共通のテーマを研究する同志なのだ。

学びのモチベーションを始動させるのは「セッション」。大学の教授など専門家と自分たちの先生とのやりとりから、知的探究活動に火がつく。そして、寮に戻ってから彼らの「セッション」は続く。

彼らはここで寝食を共にしながら、何を学び、どんな成長を見せるのでしょうか？

〔スクール・フィロソフィの実践①〕

子どもたちが「生き方」を創っていく、学びの共同体。

暁星国際学園 ヨハネ研究の森コース

取材・執筆／倉石寛（立命館大学福盛経営哲学研究センター副センター長）
金井文宏（立命館大学福盛経営哲学研究センターRIETALABO代表） 奥野美里
写真／浜田智則

キーワード①

〈自学〉

教えないのに、なぜみんな学ぶのか？

千葉県木更津市にある暁星国際学園ヨハネ研究の森コースは、自らの



関心を起点に探究し、学年を超えて学び合う全寮制の学校です。ここでは、自ら学ぶ子どもたちを「研究員」、彼らと共に生き共に学ぶ大人を「主任研究員」（学校の先生に当たる）と呼んでいます。研究員は58名（小学校6年〜高校3年）、主任研究員は14名います。

近代以降の学校教育では、必要な知識を「伝達する」ことを最優先してきました。学校で行われる一斉授業は、先生が持つ知識を、多くの生徒にできるだけ効率的に伝えるために採用された方式と言えるでしょう。学力テストや大学入試は、主にどれだけの知識を身につけているか、記憶力を問うものでした。

しかしそれは、学力のほんの一部を測る指標に過ぎません。学力を「生きる力」——子どもたちが社会の中でよりよく生きていくための基礎力と捉えるならば、従来の学校教育で

は不十分と言わざるを得ないでしょう。2020年度に導入される新学習指導要領でも、一斉授業へのアンチテーゼとして、アクティブラーニングやプロジェクト学習の導入が進められています。

一方、ヨハネ研究の森コースでは、知識を伝える一斉授業は行わず、専門書や教科書をもとに自ら学ぶ「自学」によって、知識を身につけていきます。教える人がいないのに、なぜそのようなことが起こるのでしょいか。「場とプロセスのデザイン」という観点から、ヨハネ研究の森コースの学びを考えてみましょう。

研究員（生徒）と主任研究員（先生）が、机を並べて「研究」する。

ヨハネ研究の森コースの学びの拠点は、教室ではなく「研究室」です。入ってまず驚くのは、その不思議なレイアウト。生徒たちの机が一方向を向いた、いわゆるスクール形式ではないどころか、数人が机を合わせたグループワークのスタイルでもありません。一人ひとりが「自学」しやすいレイアウトを、子どもたちと先生が一緒に考えています。

子どもたちはそれぞれ机に向かい、自分が探求したいテーマの本を読んだり、考えをまとめてノートで



研究室の書籍は、学校側が選んでおいているものではありません。子どもたちはそれぞれ自分専用の本棚を持ち、自分が読みたい本を並べています。

キーワード②

〈対話〉

対話を通して相互に理解し、知識を再構築する「セッション」。

ヨハネ研究の森コースで、「自学」とともに重視されているのが「対話」。学年を問わず全員が参加する「セッション」と、教科ごとに行う「ゼミ」が、その実践の場となっています。セッションでは、専門家の話に対して主任研究員（先生）が問いかけるやりとりを契機に、子どもたちも専門家に問いかけをし、自分なりの理解を構築していきます。毎回白熱し、予定時間通り終わることはまず

「教えない」のに「変わる」。
寮生活の中での主体的な学び。

授業時間を超えて学び続けられること。尊敬する先輩のすべてに関心、

作ったりしています。机の上の書籍から、それぞれが今、何に関心を持っているのかが見えてきます。

時折、先生に相談に来る生徒がいますが、その場で答えを教えることはありません。書籍を紹介したり、考えを深める質問を投げかけ、子どもたちが自ら探求する力を育てています。逆に、先生が子どもたちから学ぶことも多いと言います。

ひとつのテーマを教科・学年の枠を超えて全員で研究する。

一般的な学校では、知識を教科ごとに分け、学年を積み重ねて教えることが主体となっています。それは知識を効率的に伝えるという意味では有効でしたが、現実の生活とどのような関わりを持っているのか、課題を解決するうえでどのように役立てることができるのか、生きることと有機的につなげて考えていく力を育てることは難しいでしょう。

ヨハネ研究の森コースでは、教科ごとに知識を積み上げる従来の学習方法とは逆に、教科を超え、生徒も先生も一緒になって、一つのテーマを探求するという学びを重視しています。2017年度のテーマは「人類史」。大きなテーマは、いくつもの問いを生徒たちに投げかけてくれます。

別の学校から転入した当初、「教えられる」ことに慣れた生徒は、「教えない」ヨハネの学びに戸惑います。ここでは「自分」を持つことなしに学ぶことはできないからです。しかし、半年もたつと彼らは、学びの共同体の中で主体的に学ぶようになります。理解を深めて生き方を変えていきます。

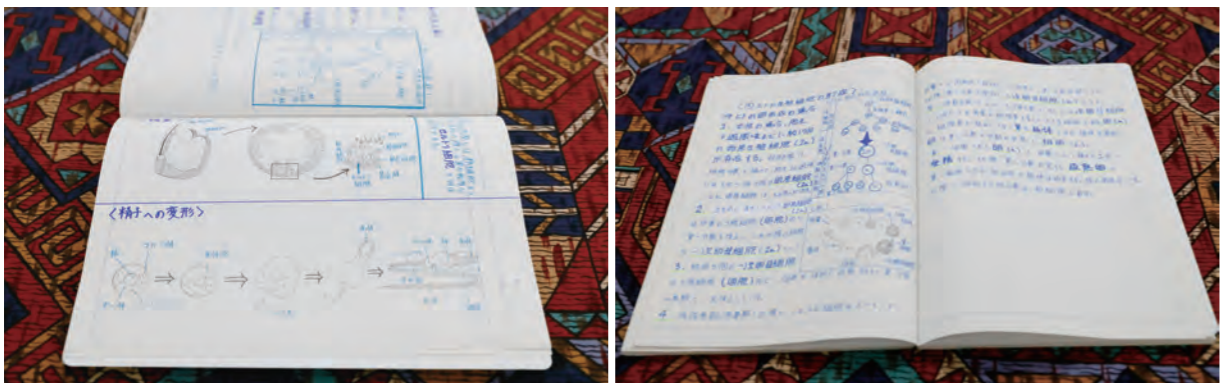
「私たちの仕事は、ただ、待つことです。永森貴子先生は言います。「子どもたちの戸惑いを受け止め、待ち切ることで信頼が生まれ、彼らは安心して、主体的に学び始めることができるのです」。

教育学者の林竹二氏は『学ぶということ』（国土社）で、「学んだことの証しは、ただ一つで、何かが変わることである」と記しています。このような子どもたちの変容こそ、ヨハネ研究の森コースが、本来の意味での学びの場となっていることを表しているのではないのでしょうか。



す。ここでは教科ごとの知識は、その問いに答えを出すためのツールとなります。そして、「答えを知りたい」という欲求から、彼らは膨大な書籍を読み、比較・検討し、教科を横断して自分なりの答えを見つけていきます。教科ごとに分断された知識を結び直し、課題解決につなげる方法を実地で学んでいるのです。

学びが深まると同時に、根源的な問いも生まれてきます。それは、生き方、哲学と関わる問いです。「自分とは何ものか?」「人間とは何か?」。ヨハネ研究の森コースの生徒は、日常的に「生きることの意味」を自身に問いかけています。そして、その答えを探究するために自ら当事者性を持って学んでいるのです。



ノートづくりは自学の基本です。専門書や教科書をもとに自らの学びをノートに構築していき、知識を血肉としていきます。

「学びの共同体」のつくり方。

インタビュー／倉石寛
協力／笠原正大（ヨハネ研究の森コース主任研究員）

**ヨハネ研究の森コースが
できるまで。**

倉石 ヨハネ研究の森コースは、どのような経緯で創設されたのですか？

横瀬 実は原型は仙台市利府にあります。公共用地的使い道について相談を受けた際に、受験や勉強を強いるのではなく、子どもたちの学びたいという気持ちを育てる塾のようなものをやれば良いと提案しました。すると、「つくってほしい」と言われ、細切れの学校の授業に適應できず、学びを極めたいという子どもや、集団主義のクラス運営のために不登校になっている子どもを集めた新しい私塾をつくることになりました。

私は以前、アメリカのカリフォルニア大などで、学校や社会教育などの教育機関の創立に関わるアドバイザーをしていました。その時に得た「学ぶということの根本は『知的な余暇活動』である」という実感から出発したかったのです。余暇活動といっ

活のすべて、そして生きることについて考えています。

共に学ぶ「干潟」をつくる。

倉石 ヨハネは「学びの共同体」と言われますが、その核となっているセッションについて教えてください。

横瀬 私は長年、理解というものがどのように成立しているかについて観察してきました。そして、人が新たな考えを取り入れたり、学習するということは、「片方に何かがあって、もう片方へ送り込む」という知識伝達のあり方とは異なることに気づいたのです。ヨハネのセッションやゼミでは、参加者同士が互いの理解

ても、余技ではなく人生の肝心なところに関わってくる活動です。

そして、1996年、利府にオープンしたのが、「ネオアレックス」という私塾でした。関係者から注目され、たくさんの方が視察に来られました。子どもたちがカントを読んだり、原書を広げていたり、本を山積みにしていろいろと学んでいる姿に、みなさん驚かれましたよ。

倉石 そこに暁星国際学園の田川理事長が「グローバルセッションが進む現在こそ、かつて宣教師たちが小さな部屋を借りて、寺子屋のように子どもたちを育てようとする学校をつくりたい」とやって来られたのですね。

横瀬 はい、ただ私の構想する学校の形は、文科省に認められるものではないだろうと当初は考えていました。しかし、ちょうどその頃、「教育特区」という制度が作られ、日本国内に新しい教育の場を作ろうという気運が高まりました。そして、文科省が「既存の学習指導要領の枠を超

を共有し、個人の中で知識を再構築していきます。私たちが「理解の相互形成」と呼ぶこの過程を通して、自分自身の知識と理解を創り上げていくのです。

グローバルセッションでは、ある物事に詳しい専門家が語り、私や笠原先生がコーディネーターとして、自分が考えていることをベースに問いかけていきます。そのやりとりを見ていて、聞き手である子どもたちにも感じたり、わかったりすることが出てきます。

例えば、「人種の移動」について考える場合、専門家の語る内容に私はこう考えている、笠原先生はこう考えるという具合に、先生たちが自らの問いを立てて専門家と相互にやりとりします。すると、そのやりとりを聞いている子どもたちにも「人種の移動」に対するイメージができてくる。私たちはこの共通のイメージができてくる場を「干潟」と呼んでいます。

私たちコーディネーターは、専門的世界と生活世界とを結ぶ媒介者です。ヨハネ生は主任研究員である先生について、優れた人生の先輩であり、ともに学ぶ共同体の一員だと考え信頼してくれています。だからこそ先生たちの考え方を聞いてみた

えて、総合的な学習の時間を全く新しいアイデアで展開するもの」と関心を持ってくれ、研究開発指定校となりました。

こうして2001年に暁星国際学園の中に学生寮を持つ「ヨハネ研究の森コース」が誕生したのです。

生活のすべてを考える。

倉石 設立にあたり、どのようなことを考えられましたか？

横瀬 学ぶということは何か、それが機能する空間とは何かを徹底的に考えました。昔と違って現在は、外食したり、コンビニで弁当を買ってきたり、家事も代行サービスを利用したりして、生活の場で学ぶということがなくなってきました。そして、学校で学ぶことも日常の生活とつながっていません。生活世界のモノやヒト、コトとの関わりとは関係なく、学校での知識が組み上がっていくだけなんです。

ヨハネでは、彼らの生活の中で学びが活かされることを重視していま

い。そして、そこから自分なりの理解を形づくっていきたくないと真剣に耳を傾けてくれるのです。

コーディネーターの役割。

倉石 今日は卒業生の姫岡さん（P9）のセッションを見学させていただきましたが、微生物の動きを数式で説明するという内容は、子どもたちにとって決して理解しやすい内容ではありませんでした。コーディネーターとしてはいかがでしたか？

横瀬 姫岡君がしゃべっていたことは確かに難解でした。しかし私は、子どもたちに向けてわかりやすくするための媒介はしていません。媒介者である私の関心や好奇心に基

セッションでは、子どもたちは専門家の話真剣に耳を傾ける。



コーディネーターを務める横瀬先生。



子どもたちも臆せず、専門家に質問をしています。

す。だから私は、自分が理解できるところから姫岡君に問うていきました。その答えを聞いて、子どもたちも理解が進み、今まで考えてこなかったことをどう考えればいいのかわかってきます。専門家とコーディネーターのやりとりを聞く子どもたちが、どんどんその学びの世界に引き込まれていく。そのような場をつくることこそ媒介者の役割なんです。

倉石 学びと生活が密接に結びついていること、主任研究員である先生と研究員である生徒が学びの共同体となっているからこそ、学びへの高いモチベーションが持続していることがよくわかりました。ありがとうございました。



「学び方」を学んだヨハネ。研究者の道は中2から。

卒業生（ヨハネ3期生2003年入学）
 姫岡 優介さん インタビュー
 4月よりデンマークのニールス・ボーア研究所研究員（東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了）



ヨハネでは本質的な問いを立てて学び、議論の出発点の叩き台になるところを身に付けました。年間の研究テーマ、例えばヘレン・ケラーにしても、彼女が「water」という言葉を発見するところまでで1年は終わる。ゆっくりと深く物事を学んでいきます。

ヨハネといえば自学やセッションですが、実は授業以外のインフォーマルな時間に、年間研究テーマなどについて、生徒間で学びのやりとりがいっぱいあります。先輩一後輩ではなく、上級生に金魚のフンのようにつきまわって、学びの内容や学ぶスタイルを身に付けていきます。私は野口さんという上級生とずっと一緒にいました。彼の買う本を買い、メモの取り方を真似し、彼の部屋に入り浸りました。「まなぶ」は「まねぶ」から始まるので。そして、セッションの前日に「横瀬先生はこういう話をするんじゃないか？」「先生はあの本を読んでもらうよ」などと話し合っていました。

ジョン万次郎が年間研究テーマだった中2の時、「彼がなぜ南島へ流されたのか」をテーマに100ページの論文を書きました。実は、通常の黒潮の流れでは南島には漂着しないんですね。でも、その年は黒潮が蛇行していたので、うまい具合に南島へたどり着き、アメリカの捕鯨船に助けられて米国へ行きました。私は黒潮の流れがなぜ起きているのか、なぜ時々蛇行するのかを探求して論文を書いたのです。その過程で、コリオリの理論（物理学）を勉強しました。論文を書き上げたとき、「中2の今、ここまで来ることができた。次はもっと研究するぞ」という気持ちになりました。

私は大学入試に対応するようなペーパーテストの訓練はまったく受けたことがありません。しかし、新しいものに出会って、吸収する力は十分あると思っていましたので、大学入試に対する不安はありませんでした。

ヨハネでは、学びを自分の中に落とし込み、いかに血肉にするかを重視していました。だから、考えていることを書き言葉にして出す、つまり文章を書く訓練はかなりしていました。そうして既知のことからアナロジーで研究していくことを学んだのです。その過程で、学びの勘所はどこにあるかを見つける力が養われました。

“生活こそが学び”

前の学校では、「花はこう咲きます」といった知識や答えの導き方を教わってきました。でも「根っこ」の部分、どうしてこのようになっているのか、このように咲くに至ったプロセスはわかりませんでした。ヨハネでは、ハウツーではなく根の部分、どうしてそうなるのかを日常の中で考えていくことを大切にしています。それは自分の生きていく道を考える場合も同じです。方法ではなく「どのように生きていくか」を考えるようになりました。つまり、生活こそが学びなのだと思います。

“自立した個同士で分かり合う”

一緒に生活していても、それぞれ歩んできた道や出会った人が違いますから考えも価値観も違います。意見が衝突することもあります。でも、意見の押しつけはありません。そう考える根拠を聞いていくと、なるほどと思うところがあって、自分の考えが変わるときもあります。日々の行動や判断についても、どのような哲学や生き方からそれが出てくるのかを分かり合うようにしています。一緒に生活していますので、分かり合えずにいるのは辛いからです。

向き合う営みとも言えます。その中で、自分が本当に好きだった分野、ずっと関心を抱いてきた学びが現れてきます。人工知能を目標とした彼も、ヨハネでは哲学に関心を持つてきましたが、小さい頃から好きだった自然科学系が生きて行く道として浮かび上がってきたのだと思います。

倉石 私たちが生きていかなければならない社会に対峙し、主体的に自分事として関わっていく、今まさに求められている18歳像を見た思いがしました。

ヨハネ生たちは、何を考え、何を学んでいるのか？



“聞く力——深いところに向かう”

私たちはその人の言葉ではなく、その人が言葉で何を伝えたいと思っているのか、言葉の奥にある見えない部分を聞き取ろうという姿勢で聞きます。一緒に生活してだけでなく、その人の生きてきた道、さらには言葉だけでなく、身体全体の人の他者への接し方や物事への向かい方など、身体全体から読み取っていく感じです。ヨハネでは日常生活の所作を通じての学びがあるように思います。入っていくというか、全体を通じて学んでいく感じです。例えばウォーキングでも、意味を聞くよりもまずはやってから考える。身体で感じていく方法もあると思いました。

社会と向き合い、進路を選択。

ヨハネ生 僕は人間関係について考えてきて、そこを研究するために慶應大学で政治学を学びます。

ヨハネ生 僕の場合は哲学に関心を持ってきたのですが、人間とは何かを問うていくうちに、関西学院大学で人工知能の方から人間というものにアプローチしたいと考えるようになりました。

ヨハネ生 僕は甲南大学のマネジメント創造学部に進みます。キューブと呼ばれる学部で、プロジェクトを通してともに学ぶ方法がヨハネと似ていたのです。

笠原先生 ヨハネでは生徒の進路について、生徒・教員・保護者による話し合いをします。一回3時間、それを数回から十数回、本当に何回も熟議します。その話し合いの内容は普通の学校とまったく異なり、個人の成績や大学案内、偏差値などまったく登場しません。これからのような世界になっていくかを話し合い、その共有の上に、その世界の中で自分が成し遂げられる範囲を考え、そこから自分が学ぶ方向を見出ししていくという過程をたどります。それは自分を取り巻く社会と、自分自身に